

SDGs達成のために 「エシカル消費」を学ぶ — 高等学校での授業実践 —

青崎 孔 Aosaki Tadashi 長崎県消費生活センター消費者教育推進員
2012年4月県立高等学校長退職後「相談員」枠で採用。3年後、消費者教育推進員に任用替え、現在に至る



“人類は絶滅に向かっている”

—この事実を子どもたちは知りません。毎日の消費生活が自らの首を絞めていることさえ理解できていないのです。1989年改訂の学習指導要領に「消費者教育」が拡充、2012年には「消費者教育推進法」が施行、2015年にはSDGsが国連で採択されました。SDGsの採択から8年。事態は看過できないほどの脅威で、2024年1月9日に発表された2023年の世界の平均気温は産業革命前と比べて「1.48℃」上昇。パリ協定の「1.5℃の約束」は風前の灯です。

県教育庁との連携

(1)「消費者教育」は文部科学省との連携事業であるにもかかわらず、県教育庁の反応は鈍く、高校教育の担当課は「文科省からのダイレクトな通知はないので現状実施は不可能だ。関係機関からの講座依頼は多くて実施に苦慮しており、これ以上は無理だ」。これに対し消費者行政側は「この事案はそうした講座とは異なり授業として実施すべきもので、法律で義務化された以上、実施しなければならない」という立場を押し通しました。このやり取りを2年ほど続け「授業支援」という事業(以下、本事業)が成立したのです。

以後、「自治体の義務」を盾として、校長会、教頭会、教務主任会に出かけては実施に向けた説明を今も続けています。

(2)一方、義務教育の担当課も難しく、加えて

市町の教育委員会の頑なさ^{かたく}は想像を超えていました。せめてもと、実施に関する文書発出の際の鑑^{かがみ}を添付することで了承を得、講師となる市町の消費生活相談員研修を本センターで行うことで事実上の実施に踏み切ることにしたのです。ここ数年、相談員の努力が実り、中学校での実施が広がりを見せています。まさにマンパワー^{たまもの}の賜物というべき状況にあります。

(3)また、関係機関への説明と承認が必要なことから教科部会へ出かけては実施^{かか}に係る協力依頼を3年ほど繰り返しました。この教科部会の抵抗が最も大きかったのですが、それ以後の実施に向けた背景づくりに大いに役立っています。

(4)消費者教育を支える教職員の研修も大きな課題で、県教育センターと協働の講座を設定し、現在、高校の10年経過研修の中で実施しています。本来は「カリキュラムマネジメント」の観点から計画立案すべき事柄であるため、管理職研修が必須であることを提案しているところです。

高校での「授業支援」

(1)担当講師の育成は本事業の核ともいえる部分で、年度の実施内容は消費者教育推進員が作成・プレゼンし、それを基本に各担当講師が自分なりの解釈とそれぞれの担当校の希望とを加味していくという形式をとっています。

教員の初任者研修のように、授業や教材の発表と修正を1学期間繰り返して完成させます。また、講師としての資質向上(話し方、声量、生徒とのやり取り、配慮事項など)も研修して

いくこととしました。

(2) 学校には実施要項を年度当初に発出。年間計画に組み込むことを指示し5月までに申込み完了。その後、担当を決定するのですが、相談業務が主担当の相談員には3校12時間程度を割り当てています。業務多忙ななか、協力いただいている相談員には感謝しかありません。

(3) 県内のほぼすべての公立高校での実施開始から5年を経過し、ほぼ一定の評価を得ていると判断しています。

授業の具体的な流れと工夫については、実施時間1クラス2時間、最大2クラス合同で実施。テーマは「消費者市民社会の構築」「持続可能な社会の形成」「エシカル消費」を3本柱とし、2023年度は「SDGs&エシカル消費」として実施しました。校種間格差もあり授業展開には工夫が求められることから、普通校では学力、実業校では技術とキャリアにつながるようなシナリオを心がけています。授業はパワーポイントで行い、動画やデータを埋め込んで客観性と情報の信憑性を高めるように配慮しています。また、アクティブラーニングの要素も加え、学習効果を狙った工夫も行っているところですが、生徒には動画がとても好評です。

生徒の反応(実施後の感想から)

- 日本に住む私は、SDGsや地球温暖化に対してどこか他人事ひとごとのような感覚でいたが、この状態が続いていけば人類滅亡の危機にあることを知った。そのためエアコンの設定温度などの細かな節電や食品ロス削減などの取組をしっかりと心がけていきたい。そして自分が主役であることを意識して行動していくことを忘れまい。
- このまま私たちが今のライフスタイルを続ければ人類は滅亡することになり、今私たちがしていることは自ら絶滅してもよい

と言っているようなものだということを学び、「このままではだめだ。自分も何か行動を起こさなければいけない」と強く思いました。高校生である私ができることは、高い学力や社会についての正しい知識を身に付ける、そしてエシカル消費を実行することだと思い、しっかり行動に移したいと考えています。また、一人ひとりの行動が大切だと改めて実感したので自分のまわりの人にも今日のことを伝えていきたいと思っています。

課題と今後の展開

(1) 小中高と連続した取組が求められているなか、小学校は手付かずで、今は中学校での実施に注力していますが、市町ではマンパワー的にも財政的にも難しい状況なのが現実です。2023年度は、長崎大学教育学部小学校教育コースの教員の卵に向けた授業が実施できたことが唯一の救いかもしれません。

(2) 大学での授業は徐々に拡大しつつあり、今後の展開に期待していますが、担当できる人材の育成が課題として残っています。

(3) 今後の事業展開には人材の確保と財政面の問題が大きく立ちはだかっています。全公立高校での実施はそれほど簡単ではありませんが、事業継続が子どもたちの未来のステップになることを信じ、さらなる取組の充実を図ることが我々大人の責任であることを肝に銘じておくべきだと強く思っています。

写真 授業のようす

